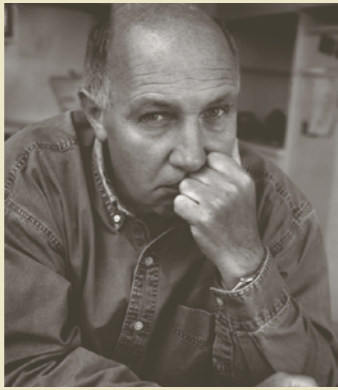


レイモン・ドゥパルドン特集 HOMMAGE À RAYMOND DEPARDON

1942年フランス生まれ。パリ在住。映像作家、写真家・国際ジャーナリストの顔をもつフランスの著名な写真家の1人である。1960年から2年間兵役を兼ねてアルジェリア戦争をルボ、続いてベトナム、イスラエル、チェコなどの動乱や、オリンピック、F・トリュフォーの映画の撮影現場などの作品で着実に地位を固め、1979年には世界最高の写真家集団“マグナム”の正会員に。1963年から映画製作もはじめておりドキュメンタリー作品で高い評価を得ている。代表作に、仏セザール賞ドキュメンタリー賞を受賞した『レポーター』(1981)や『現行犯』(1994)、山形ドキュメンタリー映画祭で市長賞を受賞した『アフリカ、痛みはいかがですか?』(1996)、カンヌ国際映画祭に正式出品された『モダン・ライフ』(2008)、そしていよいよ日本公開される『旅する写真家』(2012)などがある。報道、政治、警察、病院、そして農家、と場所や対象を変えながら、忍耐強く、慎み深く、そしてあらゆる瞬間に注意を向け続けるのがドゥパルドン映画の特徴である。自他ともに認める親日家でもあり、過去には東京オリンピックなども取材。シャネル・ネクサス・ホールにてその際の作品も含まれた写真展「DEPARDON / TOKYO 1964-2016」が9月1日 [金] から10月1日 [日] まで開催され、写真集『さすらい』(青山勝十国洋字訳)も今年8月、赤た舎より刊行予定。



旅する写真家 レイモン・ドゥパルドンの愛したフランス Journal de France

〔2012年/フランス/100分/カラー/デジタル/日本語字幕〕
共同監督：クローディーヌ・ヌーガレ 出演：レイモン・ドゥパルドン、クローディーヌ・ヌーガレ、アラン・ドロム、ジャン＝リュック・ゴダール、エリック・ロメール、ジャン＝ルーシュ ネルソン・マンデラ 他
ドゥパルドンが40年以上に渡って世界中を旅して取りためたフィルムを、自身の映像作品の製作・録音を担

当してきた妻のクローディーヌ・ヌーガレの視点によって一本の映画に編集し、その足跡を辿るふたりの共同監督作品。その内容は、ドゥパルドンの主な仕事を網羅するだけでなく、生い立ちからロマンス、またライフワークとして振り続けるフランスの日常風景まで多義に渡り、ドゥパルドンによる“ガイドブックに載らない”世界旅行日記ともいえる。

9月9日(土) シアター・イメージフォーラムほか全国順次ロードショー (配給:アンブラグド/宣伝:アンブラグド・ブレイタイム)

※上映前18:30よりメディアテークにて写真集『さすらい (Errance)』(赤た舎)についてレイモン・ドゥパルドンを迎えたトーク、サイン会を予定。サイン会にご参加希望の方は事前に同書をご購入ください。欧明社リヴ・ゴージュ店 (アンスティチュ・フランセ東京内) でご購入いただけます。
※*試写会参加には試写状、あるいは当日17:30より配布の整理券が必要です。



レポーター Reporters

〔1981年/フランス/90分/カラー/デジタル/英語字幕〕
出演：アラン・ドロム、カトリーヌ・ドヌーヴ、セルジュ・ゲンスブール、ジャック・シラク、フランソワ・ミッテラン他

レイモン・ドゥパルドンが写真通信社ガンマの報道カメラマンたちの取材に、1980年10月の一ヶ月間同行し、彼らの報道の様子、パリで起こる政治、スポーツ、文化、経済、様々な出来事を撮影した作品。まさに同通信社を設立したひとりであるドゥパルドンが手持ちカメラで、まったくコメントをつけず、「シネマ・ヴェリテ」的手法で撮影している。選挙キャンペーンのためパリの商店を訪れる共和党のジャック・シラク、シネマテーク・フランセーズでのゴダール新作『勝手に逃げる/人生』先行上映会、パーティでのカトリーヌ・ドヌーヴとセルジュ・ゲンスブール……。セザール賞最優秀ドキュメンタリー賞受賞、アカデミー賞最優秀ドキュメンタリー賞ノミネート作品



アフリカ、痛みはいかがですか?

〔1996年/フランス/165分/カラー/35mm/日本語字幕〕

アフリカを縦断しながらアフリカの現在の姿を撮った作品で、南アフリカの希望峰を見わたす360度のパン撮影から始まり、アンゴラ、ルワンダ、ブルンジ、ソマリア、スーダン、エジプトなどを経て、フランス中部のヴェルフランシュ＝シュル＝ソーヌにある監督の実家の360度のパン撮影で終る。「フランスの言語を知っているアフリカ人にとっては、《痛み》という言葉はまるで、我々のアフリカ滞在中、うまくいっていることを確認するための挨拶として使われる——「痛みはいかがですか?」、と、まるでただ「こんにちは、というように——」レイモン・ドゥパルドン



モダン・ライフ La Vie moderne

〔2008年/フランス/90分/カラー/35mm/日本語字幕〕 © Palmeraie et desert - France 2 Cinéma 2008

ドゥパルドンが、自らの出自でもある田舎の農村をライフワークとして10年以上も撮影した本作は、長い時間をかけ信頼関係を築いた上で引き出した農夫たちの素の表情、時の流れが止まっているかのように何十年も時の流れが染み付いた家や家具、そして厳しくも美しい荒涼たる自然の風景を、デジタル主流のドキュメンタリーの時代に、撮影はすべて35mmシネマスコップサイズで行われ、本当の“人間と自然の関係の豊かさ”を見事なまでにフィルムにおさめることに成功している。仏最高の映画賞とされるルイ・デュリュック賞を受賞。



現行犯 Délits flagrants

〔1994年/フランス/109分/カラー/デジタル/英語字幕〕

警察によって現行犯逮捕された人たちが留置所に到着してから、弁護士と面会するまでの一連の流れについてのドキュメンタリーで、パリの裁判所で撮影されている。スリを行った者もいれば、麻薬中毒者、DVの夫、不法移民もいる。不意に検察官と向かい合わせになった15件の軽犯罪容疑の被告人たちが狭い部屋で尋問される様子が長まわし固定ショットでとらえられる。ドゥパルドンのカメラは映されている人たちがほとんど意識しなくなるほど控え目でありながら、怯える者もいれば、卑怯そうな、ずる賢い者もいる被疑者たちや検察官たちのやり取りの中から彼らの人間性を浮かび上がらせる。



1974年、選挙キャンペーン 1974, une partie de campagne

〔2002年/フランス/90分/カラー/デジタル/無字幕・作品解説配布予定〕
出演：ヴァレリー・ジスカール・デスタン、シャルル・アズナブール、フランソワ・ミッテラン、ジャック・シラク他

1974年のフランス大統領選挙の候補者のひとりヴァレリー・ジスカール・デスタンを追ったドキュメンタリー。1974年にジスカール・デスタン自身の注文で撮影され、合意のもと、撮影されていたにも関わらず、いざ大統領に選出されると、同氏は本作が公開されることを拒み、2002年2月20日になってようやく了解し、初めて上映された。ドゥパルドンはその冷静沈着、かつ容赦のないまざしのプリズムも通して、若き大統領候補(当時、48歳で歴代上3番目の若さだった)の勝利への執着心、決して感じがいとは思えない性質、あえて選択されたその孤独を浮かび上がらせている。

DEPARDON / TOKYO 1964-2016

レイモンドゥパルドン写真展

2017.9.1 FRI—10.1 SUN
12:00-20:00 無休 入場無料

シャネル・ネクサス・ホール

中央区銀座3-5-3シャネル銀座ビルディング4F

主催:シャネル株式会社

お問い合わせ:シャネル・ネクサス・ホール事務局

(Tel:03-3779-4001)



上映スケジュール CALENDRIER

8月30日(水)
会場:草月ホール

ジャン＝ルーシュ生誕百年オープニング記念上映
あゝ夏の記録
レクチャー/シンポジウムあり
詳細は中面の開催情報をご確認下さい。
Centenaire Jean Rouch
Chronique d'un été
avec la table ronde à la Sogetsu Hall

9月1日(金)
** 19:30

旅する写真家 **Journal de France** (100')
上映前に監督とのティーチンあり(同会:小柳帝)
précédé d'une rencontre avec Raymond Depardon et Claudine Nougaret

9月2日(土) 12:15

レポーター **Reporters** (90')

14:30

1974年、選挙キャンペーン
1974, une partie de campagne (90')

17:00

アフリカ、痛みはいかがですか?
Afriques: comment ça va avec la douleur? (165')

9月3日(日) 11:15

アフリカ、痛みはいかがですか?
Afriques: comment ça va avec la douleur? (165')

14:45

現行犯 **Délits flagrants** (109')

17:30

モダン・ライフ **La Vie moderne** (90')

9月8日(金) 19:00

人間ピラミッド **La Pyramide humaine** (88')

9月9日(土) 12:30

人間ピラミッド **La Pyramide humaine** (88')

15:00

モダン・ライフ **La Vie moderne** (90')

17:30

焼かれた眼 **Les Yeux brûlés** (58')
愛は存在する **L'Amoureuxiste** (20')

9月10日(日) 13:45

モン・モン **Mosso Mosso** (73')

15:45

砕氷船 **Bateau Givre** (35')
15歳の未亡人たち
Les Veuves de 15 ans (25')

17:30

私は黒人 **Moi, un Noir** (73')

9月16日(土) 11:15

夢が作られる森
Bois dont les rêves sont faits (146')

14:30

私は黒人 **Moi, un Noir** (73')

16:30

Tomorrow パーマネントライフを探して
Demain (120')
トークあり(予定)
suivi d'un débat (sous réserve)

9月17日(日) 12:30

焼かれた眼 **Les Yeux brûlés** (58')
愛は存在する **L'Amoureuxiste** (20')

14:45

Tomorrow パーマネントライフを探して
Demain (120')

17:30

砕氷船 **Bateau Givre** (35')
15歳の未亡人たち
Les Veuves de 15 ans (25')

10月13日(金) 18:00

コンゴ川
Congo River au-delà des ténébres (116')
suivi d'un débat avec le réalisateur sous réserve

10月14日(土) 13:00

スワッガー **Swagger** (84')

15:15

ポーリーヌ、菓立つ **Pauline s'arrache** (88')

17:30

なんだこの仕事は?
C'est quoi ce travail? (100')

10月15日(日) 11:30

ポーリーヌ、菓立つ **Pauline s'arrache** (88')

13:45

ゲヘナの記憶 **Souvenir de la Gêhenne** (58')

16:00

スワッガー **Swagger** (84')
上映後、森千香子とのティーチンあり
suivi d'un débat avec Chikako Mori

10月20日(金) 13:30

ありがとう社長! **Merci patron!** (90')

15:45

夢が作られる森
Bois dont les rêves sont faits (146')

19:00

ゲヘナの記憶 **Souvenir de la Gêhenne** (58')

10月21日(土) 14:00

24時間診療
La Permanence (97')

16:30

フランス映画への旅
Voyage à travers le cinéma français (190')

10月22日(日) 12:30

24時間診療
La Permanence (97')

15:00

なんだこの仕事は?
C'est quoi ce travail? (100')

17:30

ありがとう社長! **Merci patron!** (90')

プログラムはやむを得ぬ事情により変更されることがありますが予めご了承下さい。
■ 入場料金: 一般:1200円/学生:800円/会員:500円 ■ 開場: 各回上映開始15分前 ■ チケット販売時間: 上映当日各回の30分前から上映開始10分後まで。チケット販売時間内には、当日すべての回のチケットをご購入いただけます。全席自由。整理番号順での入場とさせていただきます。上映開始10分後の入場は、他のお客様へのご迷惑となりますので、固くお断りいたします。*9月1日の試写会参加には試写状、あるいは当日17:30より配布の整理券が必要です。



〔会場・お問い合わせ〕
アンスティチュ・フランセ東京 (旧・東京日仏学院)
〒162-8415 東京都新宿区市谷船河原町15
Tel.03-5206-2500 | Fax.03-5206-2501 | www.institutfrancais.jp/tokyo/

〔山形国際ドキュメンタリー映画祭 関連企画 PROGRAMME ASSOCIÉ DU YAMAGATA INTERNATIONAL DOCUMENTARY FILM FESTIVAL〕

DOCUMENTAIRES FRANÇAIS

D'HIER ET D'AUJOURD'HUI

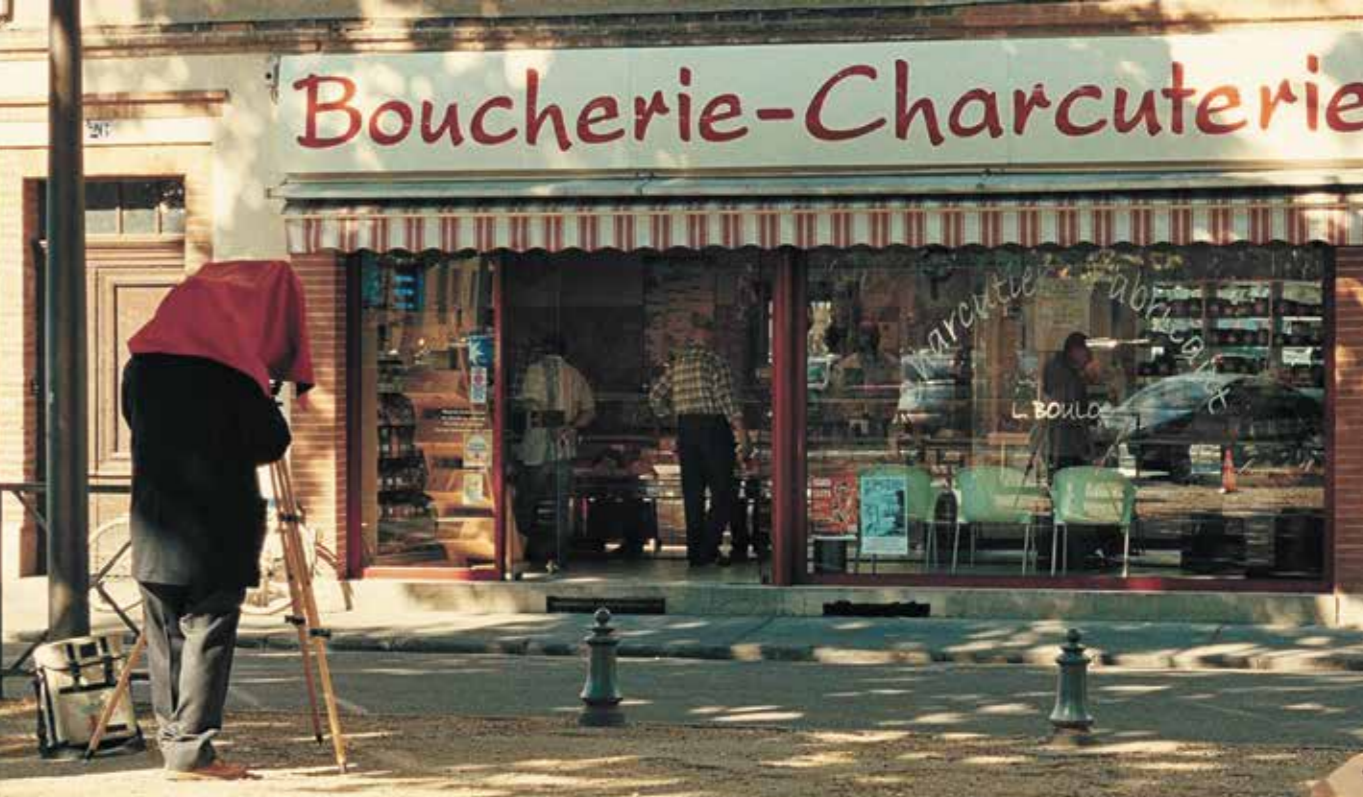
フランス・ドキュメンタリー映画 その遺産と現在

〔GUESTS〕

レイモン・ドゥパルドン (写真家/映画監督) / クローディーヌ・ヌーガレ (プロデューサー/映画監督)

ティエリー・ミシェル (映画監督) / 森千香子 (社会学者) / 小柳帝 (ライター/編集者)

RAYMOND DEPARDON / CLAUDINE NOUGARET / THIERRY MICHEL / CHIKAKO MORI / MIKADO KOYANAGI



会期 2017. **8.30** (水) → **10.22** (日)

会場 アンスティチュ・フランセ東京 エスペース・イマージュ

du 30 août au 22 octobre 2017

à l'Institut français du Japon - Tokyo



山形国際ドキュメンタリー映画祭2017が10月5日〔木〕から12日〔木〕に開催される今年、アンスティチュ・フランセ東京では、フランスのドキュメンタリー映画の代表的作品から新しい作品まで選りすぐり、特集します。シャネル・ネクスス・ホールにて9月1日〔金〕から10月1日〔日〕まで写真展「DEPARDON / TOKYO 1964-2016」が開催されるフランスの偉大な写真家、ドキュメンタリー作家レイモン・ドゥパルドン、そして公私に亘るパートナーであるクローディヌ・ヌーガレを迎えて、特集上映、トークショーを予定しています。また今年生誕百年を迎える「シネマ・ヴェリテ」の偉大な監督ジャン・ルーシュの特集、シンポジウムの開催、そして多様なアプローチや主題の最新のドキュメンタリー作品も数多くご紹介します。

ジャン・ルーシュ生誕百年 CENTENAIRE JEAN ROUCH

直感とひらめきに満ちた映画作家、ジャン・ルーシュは映像人類学者でもあり、民俗学的、社会的作品、フィクションなどあらゆるジャンルを横断し、その自由な精神と好奇心、人間性に満ちた作品はゴダールを始め、ヌーヴェル・ヴァーグの作家たちにも多大な影響を与えました。第二次世界大戦中に土木技師として始めてアフリカの地に渡ったルーシュは、その地で、ニジュールの民俗学を発見しました。フラハティやヴェルトフ、ムルナウの映画に影響を受け、映画への情熱を抱いていたルーシュは、世界を発見するための手段として自然とカメラを選択し、膨大な本数（120本以上）の映画作品を残しています。

<p>シネマ・ヴェリテの映画作家 ジャン・ルーシュ生誕百年記念 オープニング上映＋シンポジウム 2017.8.30〔水〕 会場＝草月ホール（青山）（東京都港区赤坂7-2-21）</p>	
プログラ	
昼の回	夜の回
<p>13：30 開会の辞：マリー＝クリスティヌ・ド・ナヴァセル（ジャン・ルーシュ生誕百年記念委員会委員） レクチャー：須藤健太郎（映画研究者）</p>	<p>18：00 シンポジウム 登壇者：マリー＝クリスティヌ・ド・ナヴァセル（ジャン・ルーシュ生誕百年記念委員会委員）、諏訪敦彦（映画監督）、金子遊（映画作家・批評家）、岡田秀則（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、司会：坂本安美（アンスティチュ・フランセ日本 映画プログラム主任）</p>
<p>14：00 上映『ある夏の記録』</p>	<p>19：00 上映『ある夏の記録』</p>
<p>入替制/入場料（当日券のみ）一般1500円、シニア・学生1200円、アテネ・フランセ文化センター/アンスティチュ・フランセ東京会員1000円 お問合せ：アテネ・フランセ文化センター（TEL：03-3291-4339〔13:00-20:00〕 www.athenee.net/culturalcenter/）</p>	



私は黒人 *Moi, un Noir*
〔1958年/フランス/73分/デジタル/カラー/英語字幕〕
出演：ウマル・ガンダ、トル少年、アラサス・メガ、アマンドゥ
ニジュール出身の3人の青年と一人の女が象牙海岸のアビジャン（現コートジバール共和国の首都）郊外のトレジュヴルに身を落ち着ける。故郷を後にした彼らにとってその暮らしは厳しいものであり、三人は機械化された文化を目のあたりにする。憧れのアメリカの俳優の名前エドワード・G・ロビンソンの名前を自称する主人公によってその体験が語られる。1959年ルイ・デリュック賞受賞。「**最も大胆でありながらも慎みに満ちた作品だ。ここには真実がある**」——ゴダール



に自分自身の役を演じながら参加する。



砕氷船 *Bateau Givre/ Brise-glace*
〔1987年/フランス/35分/デジタル/カラー/英語字幕〕
氷原に閉じ込められてしまった船を連れ戻す任務で出発したスウェーデンの砕氷船「フレイ（神）」に乗り込んだジャン・ルーシュは、船とその乗組員たちの日常の作業をカメラにおさめる。これまでの撮影では体験したことのない白く冷たい氷が映す様々な色彩（船の鋼鉄が反射した色、空の雲の合間から差す色）で変化していく「光」や、「音」（機材の振動する音、波の音、氷の薄片が擦れ合う音など）と戯れて撮影が行われる。1988年ベルリン国際映画祭国際映画連盟賞受賞。

発掘された名作ドキュメンタリー GRANDS CLASSIQUES DOCUMENTAIRES FRANÇAIS



愛は存在する *L'Amour existe*
〔1960年/フランス/20分/デジタル/モノクロ/英語字幕〕
監督：モーリス・ピアラ

モーリス・ピアラの処女中編作品。50年、クルブヴォア、シュレンヌ、サン＝ドゥニ、ヴァンセンヌ、バンタン…、貧しい農村が広がるパリ郊外をさすらう。エディット・ピアフの歌やアルゼンチンのバンドネオン、ギターのドライな音が背後に流れ、地下鉄や、バス、電車で移動する労働者たち、建物、光を捉えるモノクロの力強い映像には時折、詩的な瞬間が訪れる。本作は人間が隷属させられ、美しいものが破壊されていく産業社会、集中する都市開発への哀調を帯びた批評にもなっており、ピアラ自身によって読まれる怒り、失望、悲しみがこもったテキストがすばらしい。1961年ルイ・リュミエール賞受賞。半世紀以上も経て、デジタル修復され、2017年フランスで再公開され、大きな話題となる。

新作セレクション SÉLECTION NOUVEAUTÉS



Tomorrow パーマネントライフを探して *Demain*
〔2015年/フランス/120分/カラー/デジタル/日本語字幕〕
監督・出演：メラニー・ロラン、シリル・ディオ

学術雑誌「ネイチャー」に発表された、今のライフスタイルを続ければ、人類は滅亡するという論文に衝撃を受けた女優メラニー・ロランがジャーナリストの友人シリル・ディオと共に、未来を幸せに暮らすためのライフスタイルを求めて旅をする。「農業」「エネルギー」「経済」「民主主義」「教育」の5つの分野を渡り、パーマカルチャー、トランジション・タウン、ゼロ・ウェストなど、世界中の新しい取り組みを行っているパイオニアたちと出会い、滅亡しない方法を探っていく。2016年セザール賞最優秀ドキュメンタリー賞受賞作品。



なんだこの仕事？ *C'est quoi ce travail ?*
〔2015年/フランス/100分/カラー/デジタル/英語字幕〕
監督：リュック・ジュール、セバスチャン・ジュス

彼らは仕事事中。毎日80万個の車の部品を生産する工場の工具とアトリエで音楽創作に励む作曲家ニコラス・フリーゼ。それぞれが彼らの仕事を彼らのやり方で語る。そして、それぞれが彼らのやり方で疑問を投げかける…とところで、仕事ってなんだろう？「**本作の持つ非常に政治的な側面が、作品がサスペンスやさまざまなレベルでの解釈や問いかけ、そして絵画的な美しさを担う事まったく妨げていない。これこそまさに「仕事」と呼べるだろう**」——セルジュ・カゲンスキ（ラジエロキティブル）



焼かれた眼 *Les Yeux brûlés*
〔1985年/フランス/58分/デジタル/モノクロ/カラー/無字幕・日本語同時通訳〕
監督：ローラン・ロット 出演：ミレユ・ペリエ、レイモン・ドゥパルドン、ピエール・シェンデルフェール、ラウル・クタル

1985年、25歳のローラン・ロットは、当時義務とされていた兵役に就き、軍の映画・写真機関より戦争報道写真についての映画を作るように注文を受ける。フランス軍が参戦した世界中の紛争、植民地での内乱の映像のアーカイヴへのアクセスを許可されたロットは、そこから軍の希望している戦意高揚のための映画からはほど遠い作品を作り出す。ひとりの女性が行りのシャルルドゴール空港に軍隊用スーツケースを取りに来る。それは1954年5月8日にディエン・ベン・フーで消息を絶った報道カメラマンジャン・ペローの遺品だった。やがて若い女性とペローと同僚だった記者たちが語り合い始める。レイモン・ドゥパルドンもヴォイスオーバーでいくつかの映像についてコメントしている。「『**焼かれた眼**』はたんなる注文の転用ではない。心揺さぶる本作は、注文した者へ受け取り通知とともに送り返された注文文となっている。」——セルジュ・ダネー



ゲヘナの記憶 *Souvenir de la Céhenne*
〔フランス/2015年/58分/カラー/デジタル/英語字幕〕
監督：トマ・ジェンコー

フランス北部グランド＝シント。地元の40代の男による若いマグレブ系青年の憎悪殺人から10年。監督のトマ・ジェンコーは極右政党国民戦線が選挙で重要な勝利をおさめた彼の地元に戻ってきた。特別に開示された事件の正式な報告書のナレーションを背景に、都市の光景の素晴らしい映像と現地で集めた証言やうわさ話が組み合わされている。その編み目は次第に細かくなり、一見するとそこに浮かび上がってくるのは事件の骨子に過ぎないが、実のところそれはまるで“ゲヘナ”での地獄のドラマの再現をなしているのかのようだった。



ポーリーヌ、巣立つ *Pauline s'arrache*
〔2015年/フランス/88分/カラー/デジタル/英語字幕〕
監督：エミリー・プリサヴウワヌ

15歳のポーリーヌは、家族の中で唯一まだ両親の元で暮らしている。かつての夜の女王である母親とドラッグQueenの父親との間で彼女の日常は波乱含みだ。2年にわたり異父姉のエミリーによって撮影された家族のアーカイヴとありのままが映った映像で描きだされるポーリーヌ…。そこで我々は生命力に満ちた、時にはいらいらさせられるけれどもおかしな魅力のある女の子を発見する。カメラが彼女を追った2年の間「人はいつ、どのように大人になるのか？」という根本的な問題が浮かび上がってくる。“巣立つ”ため、子どもはいつ家族の庇護を離れるべきなのだろうか？



ありがとう、社長！ *Merci patron !*
〔フランス/2015年/90分/カラー/デジタル/英語字幕〕
監督：フランソワ・ルッフアン

LVMHグループに属すブランドKenzoの服を製造していた工場がフランス北部の街ボワ＝デュ＝ノールからポーランドに移転したことで、ジョスリヌとセルジュのクルール夫妻は職を失い、借金はかさみ、家をも失う危機に瀕している。彼らを救うべく、ファキール・ジャーナルの設立者であるフランソワ・ルッフアンが彼らの罪をノックする。ベルギーの税務調査官、共産主義の修道女、労働組合の代表、高級デパートサマリテヌの元販売員らと共に、クルール夫妻の一件をグループのCEOベルナル・アルノーの情に訴え、LVMHの株主総会へ持ち込むつもりだ。しかし、反骨心に満ちた現代のダヴィッドたちは、世界最大のブランド・グループ、そしてフランス一の億万長者であるゴリアテを相手にうまく立ち回ることができるのだろうか？2017年セザール賞最優秀ドキュメンタリー賞受賞作品。



夢が作られる森 *Le Bois dont les rêves sont faits*
〔2016年/フランス/146分/カラー/デジタル/英語字幕〕
監督：クレール・シモン

建物を見たリエンジン音を聞いたりすることに耐えられない…そんな都会にうんざりするような日がある。そういう時、人々は自然を思い出し、森に思いを馳せるものだ。歩道から小道を抜けて、さあ、到着！都会の喧騒から遠く離れた草原。よみがえってくるのは田舎、森、そして子ども時代。信じ、理解する。それは本物の幻想であり、手の届く範囲にある野生の世界。富貴や年齢、国籍、同性愛者か異性愛者か、流行りずたりも関係ない、全てに開かれた場所。再び発見されたパラダイス。不可能な事だと誰が言えるだろうか？2016年のフランスのドキュメンタリー作品の中でも大変高い評価を得て、「カイエ・デュ・シネマ」誌をはじめ、多くのメディアで2016年ベスト作品の一本に選ばれている。



フランス映画への旅 *Voyage à travers le cinéma français*
〔2016年/フランス/190分/カラー/デジタル/英語字幕〕
監督：ベルトラン・タヴェルニエ

映画史に造詣が深いことでも有名な映画監督ベルトラン・タヴェルニエが、人生において記録に残るフランス映画や監督について語りながら、フランス映画史を旅する。旅はジャック・ベッケルから始まり、ジャン・ルノワール、ジャン＝ピエール・メルヴィル、そしてマルセル・カルネへと続いていく。タヴェルニエはジャン・ギャバンへの情熱を表明し、もっとも偉大な俳優と評する。ジョゼフ・コスマや『アタランタ号』のモーリス・ジョベールら偉大な作曲家を紹介しながら、フランス映画音楽へのオマージュも示される。2016年カンヌ国際映画祭クラシック部門出品作品。同年ニューヨーク映画祭でも紹介され、話題を呼んだ。



24時間診療 *La Permanence*
〔2016年/フランス/97分/カラー/デジタル/英語字幕〕
監督：アリス・ディオップ

新たにやってきた移民たちのための24時間対応のヘルス・ケア窓口。ここでは行列が長くても決して個々人の存在を忘れることはない。また社会学的なアプローチが一月後に戻ってきた患者の心からの感謝を消し去る事もない。たとえその患者が痩せてしまっていたり、逆に健康を取り戻したりしていても。パリ郊外ボビニーのアヴィセンス病院のヘルス・ケアの診察室。ここでは、横に控えている精神科医と共に、総合診療医が誤った希望を持つことなく、しばしば英語を用いながら、身体と魂を癒そうと試みている。乏しい医療手段しかない現場で、虐げられ、餓えや心の傷に苦しめられている人々をどのようにして救うことができるのだろうか？



スワッガー *Swagger*
〔2016年/フランス/84分/カラー/デジタル/英語字幕・日本語同時通訳〕
監督：オリヴィエ・パピネ

フランスで最も恵まれない公営住宅地、パリ郊外のオルネーとスヴランのど真ん中で育った11人の驚くべき個性を持った子どもたちとティーンエイジャーたち。彼ら独自の奇想天外な視点、面白く、ショッキングでさえある考え方で眺めた世界を見せてくれる。出会いのモザイクを展開しながら、ミュージカル・コメディやSFなどさまざまなジャンルを横断し、映画はパリ郊外のオルネーとスヴランに住む子どもたちの言葉や憧れを現実に近い助けをする。厳しい生活を送りながらも、子どもたちは夢と希望を描けずについて、それを奪うことは誰にもできないのだから。＊10月15日の上映後には一橋大学大学院法学研究科准教授で、「排除と抵抗の郊外 フランス（移民）集住地域の形成と変容」の著者、森千香子氏によるティーチン（日本語のみ）が行われます。



コンゴ川 暗黒の向こうに *Congo River au-delà des ténèbres*
〔2005年/ベルギー/116分/カラー/デジタル/英語字幕・日本語同時通訳〕
監督：ティエリー・ミシュル

19世紀末、イギリスの探検家でジャーナリストのヘンリー・モートン・スタンリーがアフリカを横断してその河口に到着したコンゴ川は、(ルアラバ川の源流から)4371kmの長さを誇る。そのコンゴ川を渡りながら、コンゴの波乱に満ちた歴史を物語る場所を横断していく。またアーカイヴ資料からは、コンゴの植民地化を導いたスタンリーやベルギー王レオポルド2世、コンゴ独立期の指導者バリス・ルムンバやモプツ・セセ・セコらアフリカ史上の人物について記憶が語られ、アフリカの運命が迎られている。この中部アフリカへの旅は、河岸を取り囲みながら何にも屈せずに生存し続ける密生する植物とともに、人生への賛歌となっている。川を下りながら、映画は人々の喜び、苦しみをひとつひとつ記録する。丸木船を操る人、漁師、商人、旅人、闘士、反逆者、子供、兵士、ベルギーの国民兵、強姦された女性……彼らすべての人々の人生のリズムを刻むドラマ、祭が映し出される。**山形国際ドキュメンタリー映画祭セレクション作品**
Sélection du Fesetival International du Documentaire à Yamagata 2017